HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	アートプロジェクトにおけるボランティア活動の持続要因の考察 ： 瀬戸内国際芸術祭で活動するボランティアの視点から
Author(s)	三宅, 美緒
Citation	文化経済学, 第14巻第2号, 55-64
Issue Date	2017
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/67952
Type	journal article
File Information	mio,miyake.2017.PDF

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

アートプロジェクトにおけるボランティア活動の持続要因の考察
—瀬戸内国際芸術祭で活動するボランティアの視点から—

三宅　美緒*

日本語要約

日本国内で近年盛んに開催されているアートプロジェクト(芸術祭)におけるボランティア活動の持続要因をボランティアの視点から明らかにすることを目的とする。瀬戸内国際芸術祭を事例として、開催地域[1]の隣接地域に在住するボランティア参加者18名に、目的、関係、変化について半構造化インタビューをおこなった。ボランティアコミュニティを通したフィードバック[2]がボランティア活動の持続要因として、その背景について考察した。

キーワード

アートプロジェクト、ボランティア、持続性、コミュニティ、フィードバック

Summary

The principle purpose of this study is to clarify the sustainability of the art projects' volunteers. The study focuses on the volunteers for art projects convened in near-urban and surrounding rural areas. The study is conducted at the International Art Festival, "Setouchi Triennale". We invested the purposes of volunteer activities, the relationship among volunteer, and the changes of cumulated experiences through semi-structured interviews with the volunteers. The results of this study showed that the feedback through the volunteer community was involved. And we consider about the background to promote the feedback.

Key Words

art project, volunteer, sustainability, community, feedback

I　はじめに

1990年代以降、地域振興や地域活性化を目指した「アートプロジェクト（芸術祭）」を地方自治体が開催するようになった[3]。こうしたアートプロジェクトは、芸術活動の促進だけを目的とするのではなく、地域の歴史や文化、景観を取り入れた作品を制作し、創造性を通した地域経済や地域社会の発展を期待する「まちづくり政策」の一環として開催されていることが多い。そこでは、地元住民とアーティスト、アートプロジェクト作品の鑑賞者との人的交流促進や、地域資源の再評価による地域の自信の回復など社会問題の解決が期待されている。

まちづくりの地域活動拠点の立ち上げ経緯を類型化した石塚（2004，175ページ）は、「行政動機付け型」をさらに分類し、「外部支援型」を「専門家組織によるバックアップにより活動を開始するタイプ」であると述べている[4]。アートプロジェクトの開催地域が過疎高齢化によって地域関係者だけで運営できない地域の場合、地域外からプロデューサーやアーティスト、コーディネーターなど専門性を持つ者や、ボランティアが運営の支援者として地域に介入することになる。このように、アートプロジェクトは、開催地域の内外から多様な関係者が関わることになる。地域外から来る「よそ者」が持つ役割や効果を評価した敷田（2009）は、地域がよそ者の持つ力を積極的に活用することで、両者が相互変容していくプロセスこそがまちづくりであり、持続可能性があると述べている。地域外関係者により活動が開始された後は、地域住民が地域外関係者の力をより有効に活用しながら協働することで、持続したまちづくりを目指すことが可能である。

地域外関係者の中でも、ボランティアは開催準備や運営の主力メンバーとして活動し、その過程で開催地域の

* 北海道大学大学院　文学研究科　博士課程
E-mail：miohm@let.hokudai.ac.jp
原稿受理月日：2017.3.31
掲載可能原稿受理月日：2017.7.20

ファンとして地域活動を支援するなど、アートプロジェクトを通した地域活性化に貢献する役割が期待されている。こうした役割を恒常的に期待する際、ボランティアの中でも開催地域の隣接地域の都市に在住する者が支援者として適任である。その理由としては、隣接地域の住民は、開催地域と文化的な共通点や地域の情報を得る機会が多いため相互理解がしやすいこと、活動を支えるにあたっての時間的、金銭的負担が比較的少ないことなどが考えられる。

ボランティアが地域と関わりを持つためには、ボランティアがアートプロジェクトに継続して参加し、その中で地域と関わりを持てるような仕組み作りが必要である。さらに、アートプロジェクトでの労働は、吉澤（2011）が問題提起した「やりがいの搾取」ではなく、ボランティア自身の自己成長や楽しさにつながる活動にすることが重要である。そのためには、開催にむけたボランティアの努力や開催中のボランティア活動を通した影響など参加者の実態や社会的効果を把握することが望まれる。このような把握をすることは、活動の魅力や問題点を明確化し、活動の持続要因を分析することにつながる。

地方自治体主催のアートプロジェクトでは、行政を中心とする実行委員会が開催結果をまとめた報告書を発行している。しかし、多くの報告書が実行委員会の意図する目的に沿った調査、すなわち収益や鑑賞人数などの経済効果で表されており、地域住民やボランティアなど関係者個人の意識向上やエンパワーメントなどの社会的効果は十分把握検討されているとは言い難い[3]。加えて、地域住民の社会的効果に注目した先行研究、たとえば、勝村ほか（2008）や澤村（2014）による大地の芸術祭、原（2012）や室井（2012）、室井（2013）による瀬戸内国際芸術祭、吉田（2012）によるあいちトリエンナーレを事例としたものなども見られるが、ボランティアが対象ではない。そのため、ボランティアがアートプロジェクト活動や開催地域にどのような意識を持っているかなど、ボランティア側からの視点による実態把握や社会的効果についての言及は充分なされていない。

そこで本稿では、アートプロジェクトやそれに伴う地域活動での隣接地域住民ボランティアの継続した支援を可能にしていくために、ボランティア活動の持続要因を考察することを目的とする。そのために、芸術祭開催地域の隣接地域の都市に住む継続的に活動しているボランティア参加者18名に半構造化インタビューをおこない、ボランティア活動の参加目的、活動でどの関係者と関係を築いたか、活動を通してどのような変化があったか、について調査する。そして、その結果から持続要因を明らかにして、その背景について考察する。

本稿では瀬戸内国際芸術祭を事例とした。当該芸術祭の開催地である瀬戸内海地域は、江戸時代に貿易の拠点として発展した漁村集落が島嶼部に立地し、漁業が盛んな地域であった。しかし、第二次大戦後の産業政策による沿岸部の工業地域化や、それに伴う海洋汚染、また本四架橋建設による海運業の衰退などにより、島嶼部では過疎高齢化が進行した。瀬戸内海地域の沿岸部人口206万人に対して、芸術祭の会場となっている島嶼部の人口は3.2万人である[4]。

II　調査方法

調査は、瀬戸内国際芸術祭の開催島嶼部の沿岸地域である岡山県に在住する瀬戸内国際芸術祭のボランティア参加者18名を対象に半構造化インタビューをおこなった[5]。インタビューは2015年（平成27年）8月21日～27日に岡山市、倉敷市、玉野市の岡山県内にて1名につき1時間～2時間でおこなった。インタビューは対象者の希望がない限り1名ずつ一度おこなった。

インタビューは、目的、関係、変化について調査するために、参加のきっかけや主な活動内容、印象に残ったことや興味を持った点とその理由、地域や他の関係者との影響の授受や関係性の構築程度、活動を続ける理由、活動意欲についての経年変化、活動を通して感じた問題点などについて時系列に沿いながら、インタビュー対象者の話題に合わせて質問を展開した。インタビュー対象者は、ボランティアから無作為抽出ではなく、活動参加回数の多さや長さ、ボランティア間で話題に上る人などを中心に協力者を探した。協力者の多くが熱心に活動に参加しており、他のボランティアや地域住民と積極的に交流を図っている者も多く、本稿の目的からしても適任と考える。また岡山側からは、航路の関係で主要なボランティア活動に参加可能な島は限定される。そのため、特定の関係者との接点は、他島と比べて多いと言えよう。なお、インタビュー対象者と筆者とは、ボランティア活動を通してすでに顔見知りであったため、インタビューの回答に先入観を持ち込まないように注意してインタビューをおこなった。

III　調査対象事例

瀬戸内国際芸術祭は、アートツーリズムの推進のために2003年に香川県[6]が企画し、「海の復権」[7]をテーマとして2010年から3年毎に開催されている。運営の中心は香川県の文化芸術局瀬戸内国際芸術祭推進課であるが、その他、関係市町や企業なども加わり、計47団体か

ら構成される瀬戸内国際芸術祭実行委員会（以下「実行委員会」と略称）による運営となっている。実行委員会が公刊した第2回（2013年）の報告書[10]による数値指標の結果を表1に示す。

表1　瀬戸内国際芸術祭実行委員会による評価内容

指標	数値
来場者数	107万人
パスポート販売数	92094枚
事業収益	＋1.60億円
パブリシティ効果	33億円
雇用数	385人
経済波及効果	132億円

注）「瀬戸内国際芸術祭2013総括報告」をもとに筆者作成

第2回（2013年）の好評要因として、国立公園である瀬戸内海という場の特殊性、知名度の高い作家や現在人気の作家を誘致した作品の質の高さ、住民と作家、住民やボランティアサポーター「こえび隊」との心温かな人的交流があったことなどが挙げられている（瀬戸内国際芸術祭実行委員会，2013，11ページ）。報告書には表1で提示した数値指標以外にも、関係者を対象としたアンケート調査の結果[11]や、開催地で見られた新規事業や住民の行動変化、移住者による学校再開など社会的効果も記載されているが、経済的な側面の方が強調されている。

好評要因にも挙げられているボランティアは活動の中心的担い手である。ボランティアの活動内容は、屋外に設置された作品の製作や受付、撤収作業、イベントの手伝いなどである。会場である島に渡るための船代や保険代は支給されるが、集合場所の港までは自費であり基本的に無報酬である。ボランティアの運営組織（以下「事務局」と略称）はボランティアの役割を、現場で地域住民、アーティスト、来訪者の3者間のコミュニケーションを円滑にするファシリテーターであるとし、地域のために縁の下の力持ちとしてはたらく立場であると述べている（永峰，2014，56ページ）。第2回（2013年）開催時の、ボランティア参加者属性と活動状況を表2に、事務局が第2回（2013年）の会期後におこなったボランティア対象のアンケート調査（N=247）の記述回答の一部を表3に示す。

表2より、ボランティア参加者の性別では女性が、年齢層では20～30代の合計が7割程度を占めている。実行委員会による来場者の属性も同様である（瀬戸内国際芸術祭実行委員会，2013）。来場者とボランティア参加者の層の重なりは、アートプロジェクトのボランティア参加者が、ボランティアという行為ではなく、アートプロジェクトに対して興味関心を持ち、活動を通しさらに深い経験を求めている可能性を示唆している。居住地は県毎の集計であるが、開催県である香川県と岡山県のボランティア参加者は、参加者の年齢層と開催地域の高齢化率を踏まえると、会場から日帰り可能な沿岸都市である高松市や岡山市、倉敷市在住の参加者が多いと判断される[12]。また、参加回数や活動延人数より、制作段階から積極的に関わり会期時にはその作品の受付を担当するなど、熱心な参加者が多いと考えられる。参加者の半数を占める隣接地域からの参加者の参加回数が比較的多いのであれば、会期後にもボランティアと開催地域とが持続した関係性を構築し、まちづくりへの可能性があることを示唆できる。

表2　ボランティア参加者属性と活動状況（N=1248）

属性項目	人数や割合
性別	男性：26.9%、女性：73.1%
年齢層	20代：42.9%、30代：26.6%、40代：12.0%、50代：9.3%、平均年齢31.9歳
居住地	香川：42.9%、岡山：15.7%、関東：13.1%、関西：15.9%
参加回数	1回：430人、2回：222人、3回：109人、4-6回：163人、7回～：324人
活動延人数	作品受付：3849人、作品制作：2777人、イベント：620人、合計：7246人

注）「2013年こえび隊参加者集計表」をもとに筆者作成。なお、登録者数4920名に比べて参加者数が1248名と少ないのは、登録により活動認知させることを目的としているためである（事務局スタッフへのインタビューより）

表3　ボランティア活動で印象に残っていること（N=247）

項目	%	人	理由
こえび隊同士の出会い	23.5	58	世代や地域を超えて、普段会わない人たちとの交流
作品受付やお客さんと交流	16.2	40	会話や外国人客との交流、作品への理解、業務での達成感
島や地元の人と交流	12.1	30	声かけ、差し入れ
作家、スタッフ	8.5	21	一緒に作業したこと
活動そのもの	7.3	18	裏側、作品との出会い、活動がたのしい
宴	5.3	13	こえび宴

注）「こえび隊瀬戸内国際芸術祭2013参加者アンケート集計結果」をもとに筆者作成。アンケートでは自由記述を瀬戸内こえびネットワークがまとめている。なお、アンケート回答者の属性は、女性67%、20代30%、30代31%、香川県41.7%、岡山県15.8%である

表3は、印象に残った点についての回答である。これはボランティア活動の魅力とも言えるため、活動動機を分析することが可能となる。よって、本調査でもボランティア活動の参加目的を調査し、持続要因の分析につなげることとする。表3より、半数以上のボランティア参加者が、活動を通して他者と交流したことが印象に残っていると挙げている。ここで特徴的なのは、アンケートに回答した者の24%がボランティア間での交流、すなわちさまざまな世代や地域を超えてともに活動したことや、

通常の生活では会わない人たちと交流できたことが印象に残っていると回答している点である。ボランティア間での交流実態を把握することは、持続要因の明確化にもつながると言えよう。ただ、地域に対するボランティアのまなざしは高いとは言い難く、島や地元の人との交流が印象に残っている者の割合は12.1%であり、ボランティア間の交流の半分程度である。ボランティアによる開催地域への支援を考慮するならば、両者間の関係構築は今後の課題と言える。本調査では、この点にも留意し、地域との持続可能性を目指すためのボランティア活動の持続要因に注目するため、ボランティア間だけの交流に留まらず、他の関係者とどのような交流や関係構築したかについても調査し、ボランティア参加者の持続要因を分析することを目標とした。

Ⅳ　結果

インタビュー対象者18名の属性を表4に示す。インタビュー対象者は男女同数で、年齢層では30～40代が中心である。彼らの半数以上が6年間活動しており、ボランティア参加者全体の平均年齢31.9歳よりも年齢が上である。

表4　インタビュー対象者の属性

	性別	年齢層	活動開始年		性別	年齢層	活動開始年
F1	女性	40代	2010～	M1	男性	60代	2010～
F2	女性	40代	2010～	M2	男性	40代	2010～
F3	女性	30代	2010～	M3	男性	40代	2010～
F4	女性	30代	2011～	M4	男性	30代	2010～
F5	女性	20代	2011～	M5	男性	30代	2010～
F6	女性	50代	2012～	M6	男性	30代	2010～
F7	女性	20代	2012～	M7	男性	30代	2010～
F8	女性	30代	2013～	M8	男性	40代	2013～
F9	女性	30代	2014～	M9	男性	40代	2013～

注）筆者作成。なお、瀬戸内国際芸術祭の開催年以外にも「Art Setouchi」と名付けられた作品公開やイベントが開催されているため、会期外でのボランティア活動も可能である。

1. 参加目的の分類

ボランティア活動への参加目的を把握するために、参加動機や活動の魅力、活動を通して印象に残ったできごとなどについて調査した。そして、回答の中で同じ単語や近い表現ごとに類型化した結果、参加目的を「地域貢献型」、「出会い型」、「リフレッシュ型」、「スキル活用型」と4分類した。

「地域貢献型」は、地域やコミュニティの役に立ちたい、貢献したいという思いで参加している。今までに、アートに限定されないボランティア経験がある者（F6, M3）[13]や、開催地域周辺の出身者などの地縁者（M6, M9）もいた。「出会い型」は、人との出会いを期待し、交流することを期待して参加している。日常では出会わないタイプなど様々な人との出会いも楽しみにしている。「リフレッシュ型」は、活動を通して非日常体験を味わうことで、仕事などの日常生活をリセットするための気分転換として参加している。「スキル活用型」は、仕事や趣味で得たスキルを活かした活動をしている。たとえば、アーティストや元音楽関係者、カメラや楽器演奏を趣味とする者（F5, F9, M5, M9）であり、知人から活動支援を依頼されたことが参加のきっかけとなった者（M5）もいる。また、芸術分野の専門性以外にも、活動の際に、仕事で養われた段取り力などのスキルが活かされたという者（F4）もいる。

調査では「出会い型」や「リフレッシュ型」に相当する声が半数以上の者から聞かれた。「出会い型」については、事務局がおこなったアンケート結果（表3）の「交流が印象に残っている」と類似している。人と出会う目的で参加し、活動を通して交流することで新たな人間関係が構築され、さらなる人との出会いを期待するようになり、活動への参加が持続している。また、「リフレッシュ型」については、インタビュー対象者のほぼ全員が社会人として仕事に従事しており、7割以上が芸術祭とは無関係の業務である。そのため、ボランティア活動の内容を平日の仕事の状況に合わせて、「肉体系や接客系」などに使い分けている者（M8）もいた。もともとアートに対して興味関心がある者（M2）も多く、観光や遊びといった余暇活動という位置づけで参加しており、ボランティアという感覚を持っていない声(F4)も聞かれた。しかし、単なる余暇活動ではなく、作業効率や段取りを考え、実際に身体を動かすことでリフレッシュにつながったとの意見(F4)もある。ボランティア活動で様々な人と出会い、社会経験を活かしながら活動することで、様々な達成感を得ている。

ボランティア活動は一定のルールや運営マニュアルはあるものの、ボランティア個人の創造性を発揮して活躍できるような場の提供がなされている。そのため、個人で活動を進める場合はより良い方法を考え工夫する機会が、集団作業の場合は全員で相談しながら作業をするため交流が促進する機会が創出される。ボランティア活動はボランティア自身の意欲や自主性を尊重した活動であり、自由度が高い。これは、複数の目的を生じさせるきっかけとなり、目的が達成されることでボランティア参加者は、充足感を得ている。これが持続した活動につながっていると言えよう。

2. 関係構築の程度

アートプロジェクトの関係者との影響の授受や関係構築の程度について把握した。ボランティア参加者は、他のボランティア参加者、開催地域の住民、事務局スタッフなどと関係を築いたという意見があったが、特にボランティアとの関係性についてのコメントが多かった。これは、事務局がおこなったアンケート結果（表3）において、ボランティアとの交流が印象に残っているとのコメントが24%と最も多かったのとも一致している。また、地域住民との交流については強く思いを語る者（M6）がいる一方で、ボランティアとの交流で完結しており地元住民と接点を持つことは足を踏み入れ過ぎるような気がするため抵抗感があるという者（F5）もいた。

ボランティア間での交流促進のきっかけとなっている要因のひとつに、ボランティアコミュニティの存在がある。ボランティア参加者は高松、岡山、関東、関西など居住地域ごとに任意のボランティアコミュニティを形成しており、「地域名＋ボランティア名」で呼ばれている。本調査でのインタビュー対象者は岡山県在住者であり、「岡山こえび」と呼ばれている。岡山県在住のボランティア参加者の総数は196名であり、その内の30～40名程度で交流がなされている。ボランティア活動には友人を誘わず一人で参加して、新たな人間関係を築く者も多い。また、名前はニックネームやさん付けで呼ばれる。既存のグループや階層などの影響は少なく、年齢や社会経験などを意識せずに参加でき、上下関係がないフラットな関係が維持されているのが気楽だという意見（F5）があった。

ボランティアコミュニティ内での会話は、ボランティア活動に関わることや作品や地域に関する情報交換が中心であるが、他の芸術祭や音楽の話題など趣味の話などにも広がっている。ボランティア活動を通して出会う人は、価値観が合う人が多く、アート以外のジャンルでも共通の話題が多くて楽しかったとの声（F4）が聞かれた。彼らは活動をしない休日に、客として瀬戸内国際芸術祭の作品巡りをし、それ以外にもスポーツ活動や日帰りの小旅行などを計画している。このように、ボランティア活動の内外で交流が進んでおり、親密な友人関係や結婚相手に発展した例（F4, F5, F7, F8, M2, M8）もある。ボランティアコミュニティには、遊びの企画者や幹事はいるものの特定のリーダーは存在せず強制力もない。アートボランティアのコミュニティであるが、参加目的はアートに限らず多岐に渡るため、特定の趣味を通して集まったコミュニティと言うよりも、さらに緩やかなコミュニティであると考えられる。しかし、先輩ボランティアの誘いを断りにくいとの声も聞かれ、飲み会などは事務局スタッフを招いた半オフィシャルな会に移行している。

地域住民と関係を築く者は、出身地が開催地域の島や港の出身者（M3, M6, M9）、もしくは、学生時代や社会人時代に香川県に在住した者（M1, M4）など、もともと地縁があり、それゆえ開催地域への思いが強く積極的に住民と接点を持ち交流を進めていた。ボランティアの枠にとらわれず、会期外にも頻繁に島へ訪問し、地域とアートプロジェクトをつなぐ役割を果たした者（M6）もいる。また、地縁がなくても、岡山側の港からボランティア活動に参加できるのは豊島が中心となるため、豊島住民と接触する機会が多い。そのため、豊島住民と関係をつくりやすく、豊島への思いを語るボランティアが多かった。活動を通して島のファンになり、会期外に観光客として島で民泊する者（F6）もいた。

事務局スタッフには好意的な意見が多かったが、事務局自体には運営面での問題点など厳しい声が聞かれた。地域との交流に関して言えば、事務局はボランティアと地域を結ぶ持続的な関係構築や支援を目指したイベントを会期外にも拡張している[11]。これに対して、ボランティア参加者は田舎のおじいちゃん家に行くような感覚で手伝いながら（M7）も、期待される役割が大きくなるにつれ、活動への負担感が増しているという声（F9）も聞かれた。特に、スキルを期待される活動について、当初は通常の活動と同様に捉えていても、時間が経つにつれて成果や責任を負うため活動が義務化している。

開催地域の隣接地域に在住するボランティアは、地縁とまでは言えないまでも、海洋実習の体験などで瀬戸内海には幼少時から馴染みがある広義の意味で地元民である。大学進学で地元を離れ、就職で帰郷し、ボランティア活動することで単なる田舎だと思っていた地元の良さを見直したという意見（F5）もあった。また、活動に参加することで、同じような思いを抱えた感性の合う友人（F8）との出会いもある。懐かしさを感じる地元に、ボランティア活動ではなく、友人と遊びに行く感覚で気軽に活動に参加している点が持続要因と言えよう。

3. 個人やボランティアコミュニティの社会的変化

継続してボランティア活動する者が、活動を通してどのような変化があったのか、社会的変化を把握するために、活動を続ける理由や活動意欲についての経年変化、活動を通して感じた問題点などを調査した。おもに、ボランティア活動への関わり方の変化や、ボランティアコミュニティと開催地域との関係構築についての話題が展開された。

ボランティア活動への関わり方が変化する例として、積極性を増した場合と、距離を置く場合があった。たとえば、ボランティアの立場から事務局スタッフや作品内の施設職員となった例（F1，F7）や、ボランティア活動に区切りをつけ個人で地域と関わる機会を創出した例（M4，M6）である。ボランティア活動の長期化に伴い、ボランティアで対応可能な範囲を超えた複雑な内容や責任が増すことになり、ボランティア活動に限界を感じたことが要因である。「誰かが役割を担わなければならないのは明らかであり、それなら自分がその役割を果たせばよいと考えた」との発言（F1）もあった。

一方、ボランティア経験を活かし自分の居住地域で自発的に活動をはじめた者もいた。活動を通して、作家の人生観に触発されたことで自身の人生を見直し、以前から興味があった仕事をはじめた者（F2）や、地域貢献の思いから地元の若者に地域の素晴らしさに気づいてもらうべく地域活性化のイベントを開催した者（M3，M9）である。フンク（2013）が調査した、瀬戸内国際芸術祭の開催会場のひとつである直島の観光産業従事者の中には、アートよりも島へのこだわりを持って移住してきた若者がおり、既存の観光施設やサービスを補うために、個人事業主として飲食業や宿泊業をおこなっていた。本調査でも、ボランティア活動の一連のプロセスを体感し、アートプロジェクトのコンセプトである「島の価値の再評価」（北川，2013，12ページ）をすることで、島や地域を理解し、何か役立ちたいと、責任を感じ行動につながっている。加えて、様々な人との交流を通してボランティア参加者自身も自分の人生を再確認し、一方踏み出すエネルギーを得ている。

ボランティアコミュニティと開催地域とは、事務局が関与する通常のボランティア活動以外での交流が進んでいた。ボランティア間では、すでに飲み会などボランティアコミュニティ独自の活動を展開するようになっていたが、ボランティアコミュニティ内の関係が深まるにつれて、島や港など開催地域で地元住民と共に遊ぶ案が企画されるように変化していた。ボランティア参加者と地域住民は企画を通してお互い顔見知りとなり、次回以降のボランティア活動の際に個人間で交流することが可能となる。このように、ボランティアコミュニティが自律性を持った活動を進めた結果、ボランティアコミュニティ内のみの交流から地域と緩やかに関係構築がなされるようになった。

V　結論とその背景

本稿では、瀬戸内国際芸術祭のボランティアのうち、開催地域の隣接地域に在住し、継続してボランティア活動を続けている者を中心におこなったインタビュー結果から、アートプロジェクトのボランティア活動を持続させる要因を明らかにした。まず、ボランティア参加者は活動を通したボランティア間での交流の楽しさや地域への責任感など、参加目的に対する達成感によりボランティア活動に魅力を感じている。そして、ボランティア間での交流は任意のボランティアコミュニティで強くなされており、そこでの交流を通してボランティア活動やアートプロジェクトについての理解が深まると共に自己に対する振り返りもなされ、参加目的の重層化や地域住民との関係構築など広がりをみせている。

このように、ボランティア活動を持続させるには、交流を通した振り返り（フィードバック）が重要な要因であると考えられる。特に、ボランティアコミュニティを通したフィードバックがボランティア活動を持続させるのに大きな役割を果たしている。ボランティアコミュニティ内でのフィードバックは、作品や活動内容、開催地域などアートプロジェクトに関して共通の話題が存在することや、創造性を伴うボランティア活動によるボランティア個人の自己発見が基になり、促進されていた。ここで、持続要因の背景について以下の点から考察する。フィードバックのきっかけとなったボランティア間での交流段階の分類、ボランティアコミュニティでの関係構築の過程、フィードバックを促進させるアートプロジェクトの意味についてである。

1．ボランティア間での交流段階の分類

フィードバックのきっかけとなったボランティア間での交流段階を、交流の場の観点から、「活動内の交流」、「活動場所までの移動中の交流」、「活動外の交流」の3段階に分類する。

「活動内の交流」とは、事務局によって決められたボランティア活動の中で交流することである。交流内容は作品やアートプロジェクトなど直接的な内容が中心である。グループ作業の場合、終日交流をすることになるが、対面での交流だけではなく作品受付のボランティア活動において記入する日誌[15]などのツールを通して交流することもある。日誌では、前日までの記録により、他のボランティア参加者が感じ考えていることを把握でき、自分も記載することで自身のフィードバックにもつながっている。日誌は実名記載のため、記載者と会う機会があれば意見交換も可能である。

「活動場所までの移動中の交流」とは、ボランティア活動の際、集合場所から活動場所まで移動する船中で交流

することである。交流内容はボランティア活動や展示作品など、活動当日に関する情報共有が中心である。船中では事務局スタッフなど他の関係者がいないボランティア参加者だけの世界である。よって、活動に関する率直な意見交換が可能である。さらに、話すテーマが決められた場ではないため、ボランティア間で活動内容の状況や報告だけではなく、アート作品について見方や制作秘話、考えたことなど自由に交流することが可能である。往復の移動時間は各30分程度と十分な長さではないので充分なフィードバックとまではいかない。

「活動外の交流」とは、直接会うことなく主にSNSを通して交流することである。ボランティアコミュニティとして、組織の関与なしで交流が促進する場となっている。交流手段はSNSであり、交流内容は各々の活動状況の報告や飲み会などの連絡である。SNSの利用により他者の活動を間接的に振り返る機会も得ている。他者が活動している様子や写真を見て、島に行きたくなり予定していなかった休日に活動申し込みをしたという意見（F4）もあるように、活動への一体感や参加意欲も喚起されている。

2. ボランティアコミュニティでの関係構築の過程

ボランティア活動でのボランティア間の交流の場は3段階に分けられ、ボランティアコミュニティの形成は目的地への移動中に形成されたことが認められた。まず、目的地でのボランティア活動を通し、ボランティアが対話のきっかけとなる出来事やアート作品についての話題を得た。次に、帰路の船内で話題を共有することで、より顔見知りになっていった。初対面のボランティア参加者同士の往路の会話は少ないが、復路では活動の共有体験から共通の話題で交流ができていた[16]。そして、活動回数が増えるにつれて、共有する時間も長くなり、関係性が構築、強化されていった。

また、移動手段が船であることがコミュニティでの関係構築を促進させていた。特に、岡山からボランティア活動に参加する場合は、航路の関係で活動する島は豊島が中心となる。そのため、港でボランティア参加受付をおこなった後は、同じ船に揃って乗船する。こうして、豊島でそれぞれの活動場所に分かれるまでの船中では、ほぼ全員が行動を共にする。さらに、乗船人数が10名以下であるため複数のグループに分かれないことや、事務局スタッフが同乗しないため対等な関係で活動内容について議論できることも、ボランティア間での交流の促進要因となっていた。

以上のようにコミュニティ形成には、一連の活動の中でも特に移動中の船での交流が大きな役割を担っていた。そして、船中では、活動直後に一定の時間が確保されるために、当日のボランティア活動を振り返るフィードバックには最適のタイミングである。また、同じ経験をした者同士の対話により、より的確に自己の活動を振り返り考えを整理することが可能である。この点に関して、ボランティア活動に非日常的な要素を感じると述べたM2の発言に対して、F8は次のように続けている。

「船に乗るというのは、なんか特別な気分がするというか。電車なんかよりかは、旅に出るって感じがする。海に乗り出して出かけるっていう行為というか。」「で、こうこうこうだったよね、とか。今日何人来たよね、とか。400人だったぜ、とか。そういう話題になる。船だったら絶対一緒になる。」「そう、行きと帰りで同じ顔触れにあって、ちょっとスペースみたいなところで話したり、とか。」（F8とM2へのインタビューより抜粋して引用）

彼らによれば、船での移動は島でのボランティア活動という非日常体験への入口であり出口である。そして、乗船中は日常と非日常の間をつなぐゆるやかな境界部分である。特に復路は、ボランティア活動という非日常体験から日常生活に戻る通過点として、非日常体験の共有をしながら自身のボランティア活動を振り返る場となっている。

さらに、ボランティアコミュニティで活動外に交流することは、ボランティア活動を客観視することにつながる。そこでは、単なるボランティア活動ではない話題に波及することもある。ボランティア参加者は、さまざまな目的を持って参加している。そのため、ボランティアコミュニティの親睦会を企画する際に、地域への思いが強く地域と関係作りができている者がボランティアコミュニティと開催地域との橋渡しをおこない、人と出会い非日常体験を求める者が興味を持つことにより企画が活性化し、ボランティアコミュニティとして開催地域と関わりを持つようになっていた。

このように、ボランティア組織が関与した活動過程においてのフィードバック[17]だけではなく、活動外でのボランティア間の交流が進むにつれてフィードバックが促進され、ボランティアコミュニティとしての結束が強まると同時に、コミュニティとしてのボランティア活動から離れた自律性のある活動が生じていた。

3. フィードバックを促進させるアートプロジェクトの意味

ここで、フィードバックを促進させるアートプロジェクトの意味について考察する。アートは創造的活動であり、表現の自由度が高く、特に、現代美術と呼ばれるものについては、形も大きさも表現の方法も制限がない。これは、作家だけではなく鑑賞者にとっても創造性を磨くきっかけとなりうる。さらに、鑑賞者が自由に解釈し、それを他の鑑賞者と自由な意見交換することで交流が促進される効果もある。ボランティア活動の中心は作品受付である。作品受付は、終日一人で業務をおこない担当作品と向き合うことになる。特に、屋外展示の作品は時刻や天気によっても見え方が変化するため、作品の変化から想起される事柄が多い。さらに、理解しにくい作品や衝撃的なコンセプトの作品は、自分の考えを他者に伝えると共に、他者の考えも聞くような対話を求めることで自分の考えを整理することに繋がる。このように、アート作品があるからこそ交流が促進されており、フィードバックにつながっている。

また、地域でのアートプロジェクトでは、地域らしさを表す方法として、かつてその地域や家庭内で使われていた不要物を用いる作品が多い。日常生活にある身近な道具を活用しているため簡単に作れるように思えるが、作家でないとそうそう作れないものであり、分かったようで完全に理解できない面白さがある。このように、アートプロジェクトは美術館での作品鑑賞とは反対に、身近なものを活用し、そこにあるありのままが作品となるため、距離の近さがある。こうしたアートとの距離の近さは、アートプロジェクトに参加する際にも発揮される。興味を持てば誰でも自由に参加可能であり、理解しがたいながらも魅力的な作品に対して、周りの参加者と「よく分からないね」と言いながら、制作を手伝いアーティストの感性に触れることが自身に対するフィードバックの場となり、創造性を高めるきっかけとなっている。本調査でも、作品制作のボランティア活動で「自分は指示されて動いているだけであったが、作品形成のプロセスが可視化できたのがとても面白かった」点を魅力に感じ、参加回数の増加につながったという意見（M3）もあった。アートプロジェクトは展示対象がアートだけではなく、活動自体もアートである。一日の活動の中でさまざまな出来事が次から次へと起こる。その対処にはマニュアルはなく、交流しながら自分の感性を頼りに解決策を見つけて対処していく。作品と同じく活動形態もアートであり、活動の中に入り込むことでアートを体験しながらフィードバックがされている。

VI　おわりに

本稿では、ボランティア活動の持続要因として、ボランティアコミュニティを通したフィードバックを挙げた。そこでは、さまざまな参加目的や意図を持った者たちでの長期的な交流によりフィードバックが重層化し、ボランティア参加者やその周辺において変化がみられていた。また、運営組織に頼らず、ボランティアコミュニティ独自で、地域と関係構築する過程も明らかとなった。これらはアートプロジェクトにおける副次的な社会的効果であると言えよう。

本事例である瀬戸内国際芸術祭では、ボランティア運営組織がファシリテーターとして地域とボランティアをつないでいた。ボランティア参加者は非日常の体験や自己成長の機会を得ながら、運営面での支援をおこなっていた。本稿では、ボランティアの可能性について述べてきたが、まちづくりの主体となるのは外部支援者のボランティア運営組織やボランティアではなく、住民である。ボランティアの活躍は、まちづくり活動の推進力のひとつとなるが、推進する方向性を決定するのは地域の役割である。つまり、地域側がまちづくりとして期待されるボランティア人材の活用をどう捉えるのかについての意識が重要である。瀬戸内国際芸術祭は第4回（2019年）に向けて準備を始めている。地域がアートプロジェクトによって内発性を高める機会は引き続き与えられている。地域側のボランティア活動を通した地域活性化の持続性についても充分検討すべきである。

謝辞

インタビュー調査にご協力いただきましたボランティアの方々、およびご指導いただきました先生方に感謝申し上げます。査読者の先生方からいただいた多くのご助言は、今後の課題として真摯に受け止め邁進していく所存です。この場を借りてお礼を申し上げます。

注

1）本稿では、開催地域を行政域内ではなく、実際に作品が展示されるなど日常生活に何らかの影響を直接受けている地域と定義する。

2）本稿では、フィードバックを、活動を通して自己の経験を振り返ることと定義する。

3）本稿でのアートプロジェクトの射程は、行政主体で開催されるものに限定する。

4）石塚（2004）は、まちづくりの地域活動拠点の立ち上げ経緯を、大きく「自発型」と「行政動機付け型」に二分し、行政動機付け型は、既存組織が主

体的に活動する「自助型」と、「外部支援型」に分類した。

5）報告書内の社会的効果の大部分が、開催時の地域の具体的な変化やできごとの記録、地域住民や来場者へのヒアリング調査や感想の聴取の結果である。これについて吉田（2012）は、目的や評価指標が抽象的であり、来場者数などの結果（outputs）以外の市民参加や地域づくりなどの成果（outcomes）の把握が不十分であると、指摘している。

6）『香川県人口移動調査報告』（香川県，2015）、『市町村別人口』（岡山県，2015）より筆者抜粋。なお、開催地の島のうち、埋め立てにより四国本土と繋がった沙弥島以外は、国土交通省の離島振興法に基づく離島振興計画（平成25年度～34年度）の対象地である。

7）インタビュー前後の2015年3月から11月までに開催地域へ5回訪問し、文献収集や参与観察もおこなった。

8）香川県は近年、讃岐うどん巡りや映画のロケ地巡り、芸術鑑賞など、新しい分野で観光客が増加している。そのため香川県では、今後の産業振興の施策の一つに観光関連分野を入れ、「アート県」としてのブランド確立や、観光資源の充実、情報発信やターゲットを絞った誘客活動をおこなうこととしている（香川県，2013）。

9）もともとの瀬戸内海の豊かな暮らしに思いを馳せ、瀬戸内海の素晴らしさを再認識するの意である。また、来訪者と島民の交流を通した経済効果だけでない島の活性化や、近代化に伴う負の遺産を作品として表現することでプラスに転じることなども意図されている。

10）指標として挙げた以外に、メディア・SNS発信数、視察数なども記載されている。来場者数は、カウント方法の違いのため、実際は30万人程度だと瀬戸内国際芸術祭実行委員会により発表されている。

11）報告書内の調査は、会期直後の自治会役員や関係者等への意見交換会と、アンケート調査がある。アンケート調査は、会期中に来場者対象（N＝17297）が、会期後に島民対象（N＝2384）と香川県内の文化施設職員対象（N=374）がおこなわれた。なお報告書以外では、香川県による県政世論調査（N＝1522）の中で、実際に会場を訪問した人限定の質問（N=300）や、瀬戸内国際芸術祭のボランティア運営組織である瀬戸内こえびネットワークによるボランティア対象（N=247）のアンケート調査がおこなわれた。

12）瀬戸内国際芸術祭の総合ディレクターの北川（2015）は、高松から通うため、優秀なOLや男女退職者が多いという特色があると分析している。

13）F6氏とM3氏へのインタビューから得た話や考えを示している。他のインタビュー対象者に対しても，以下同様に記載する。

14）地域のプラットフォームとして作品の活用を試みる豊島における「島のお誕生会」や、地域の魅力を発信する宇野港における「撮り船プロジェクト」などである。さらに、開催地域の高齢化に伴い人手不足となっていた地域の秋祭りでの神輿の担ぎ手や、春祭り前の草刈りなどアートプロジェクト外での支援もおこなっている。

15）「日誌」とは、ボランティア活動のひとつである受付業務の際に記入するものである。主目的は、その作品の来場数や鑑賞料の把握のためであるが、他に困ったことや気づいたことなどの事務局への業務連絡や、感動したことや嬉しかったことなどボランティア個人の感想を記載する欄もある。

16）ボランティア活動は、制作時に重労働を伴うものや、屋外で暑さや虫に耐えながら、日によって1000人以上の来場者に対応するなど体力的に厳しいものも多い。この環境下の体験共有が仲間意識を芽生えさせているとも言える。

17）ボランティア組織では、これ以外にもボランティアミーティングや勉強会など企画している。しかし、主会場は事務局のある高松で開催されることが多いため、岡山からの参加は容易とは言い難い。

参考文献

フンク・カロリン「アート・ツーリズムにもとづく発展の可能性と課題―直島の事例から」『広島大学大学院総合科学研究科紀要Ⅱ環境科学研究』第8巻，2013年，77-90ページ．

原直行「アートによる地域活性化の意義―豊島における瀬戸内国際芸術祭を事例として」『香川大学経済論叢』第85巻第1-2号，2012年，71-100ページ．

石塚雅明『参加の「場」をデザインする―まちづくりの合意形成・壁への挑戦』学芸出版社，2004年．

香川県「香川県文化芸術振興計画」，2013年，available at http://www.pref.kagawa.lg.jp/bunka/kagawaart/shinkoukeikaku%20h25-h29.pdf（2015年11月26日最終確認）．

――――「平成26年度県政世論調査結果報告書」，

2014 年.
————「最新月報（H27 年 9 月）」『香川県人口移動調査報告』，香川県ホームページ，2015 年，available at http://www.pref.kagawa.lg.jp/toukei/SokuhouTmp/p201509.xlsx（2015 年 11 月 26 日最終確認）.
勝村（松本）文子・田中鮎夢・吉川郷主・西前出・水野啓・小林槇太郎「住民によるアートプロジェクトの評価とその社会的要因―大地の芸術祭妻有トリエンナーレを事例として」『文化経済学』第 6 巻第 1 号，2008 年，65-77 ページ.
北川フラム「海と島を巡る，美術の旅へ」永峰美佳・新川貴詩・吉田宏子・岩淵貞哉・山本桂子・則武優『瀬戸内国際芸術祭 2013 公式ガイドブック―アートをめぐる旅－春』美術出版社，2013 年，10-13 ページ.
————『ひらく美術―地域と人間のつながりを取り戻す』筑摩書房，2015 年.
室井研二「瀬戸内国際芸術祭の住民評価とその規定因」香川大学瀬戸内圏研究センター『瀬戸内海観光と国際芸術祭』美巧社，2012 年，1-82 ページ.
————「離島の振興とアートプロジェクト―「瀬戸内国際芸術祭」の構想と帰結」『地域社会学会年報』第 25 巻，2013 年，93-107 ページ.
永峰美佳「特集アートのお仕事図鑑」『美術手帳』美術出版社，2014 年，56 ページ.
岡山県「市町村別人口（H27 年 10 月）」『岡山県毎月流動人口調査』，岡山県ホームページ，2015 年，available at http://www.pref.okayama.jp/uploaded/life/447803_3033613_misc.xlsx（2015 年 11 月 26 日最終確認）.
澤村明編著『アートは地域を変えたか―越後妻有大地の芸術祭の 13 年：2000-2012』慶應義塾大学出版社，2014 年.
瀬戸内こえびネットワーク『2013 こえび隊参加者集計表』，2013 年.
————『こえび隊瀬戸内国際芸術祭 2013 参加者アンケート集計結果』，2013 年，available at http://www.koebi.jp/archives/002/201403/5327e92168645.pdf（2015 年 11 月 13 日最終確認）.
瀬戸内国際芸術祭実行委員会『瀬戸内国際芸術祭 2013 総括報告』，2013 年.
敷田麻実「よそ者と地域づくりにおけるその役割にかんする研究」『国際広報メディア・観光学ジャーナル』第 9 巻，2009 年，79-100 ページ.
吉田隆之「都市型芸術祭「あいちトリエンナーレ」の政策評価―政策立案・決定過程の考察を踏まえて」『文化経済学』第 9 巻第 2 号，2012 年，56-67 ページ.
吉澤弥生「若い芸術家たちの労働」『アートプロジェクトの事例にみる芸術労働の社会学的研究』2009-2010 年度科学研究費補助金調査報告書，大阪大学，2011 年.